

三光卷

二祖行者三行著
安藤孝校正

全

特56

746

014086-000-8

特56-746

三光卷

第二祖行者三行／著

M19

ABB-0346



特 56
718

高



子

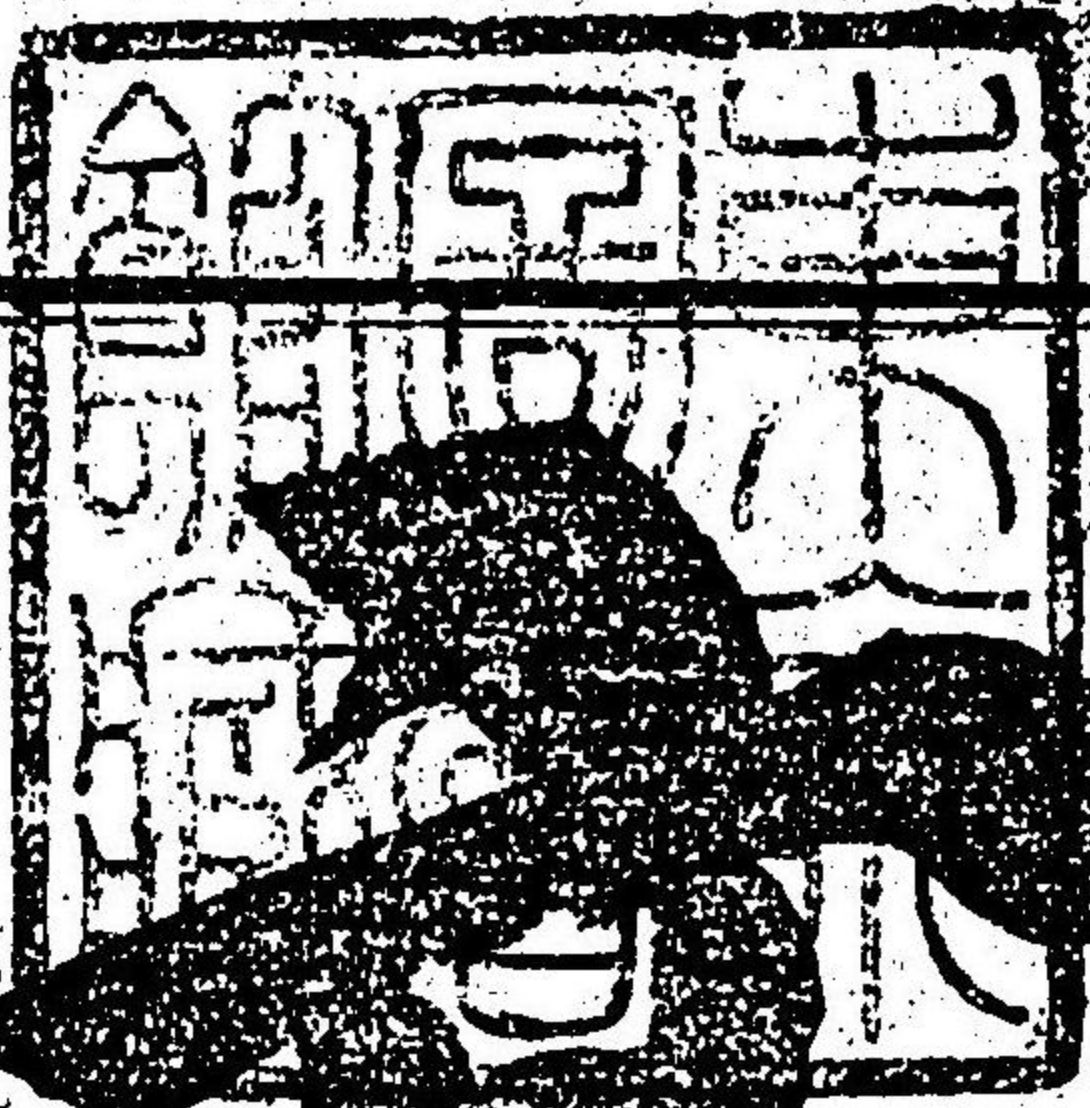
1882

三祖行者三行者
安藤孝板正

三祖行者

三祖行者

特 56
746

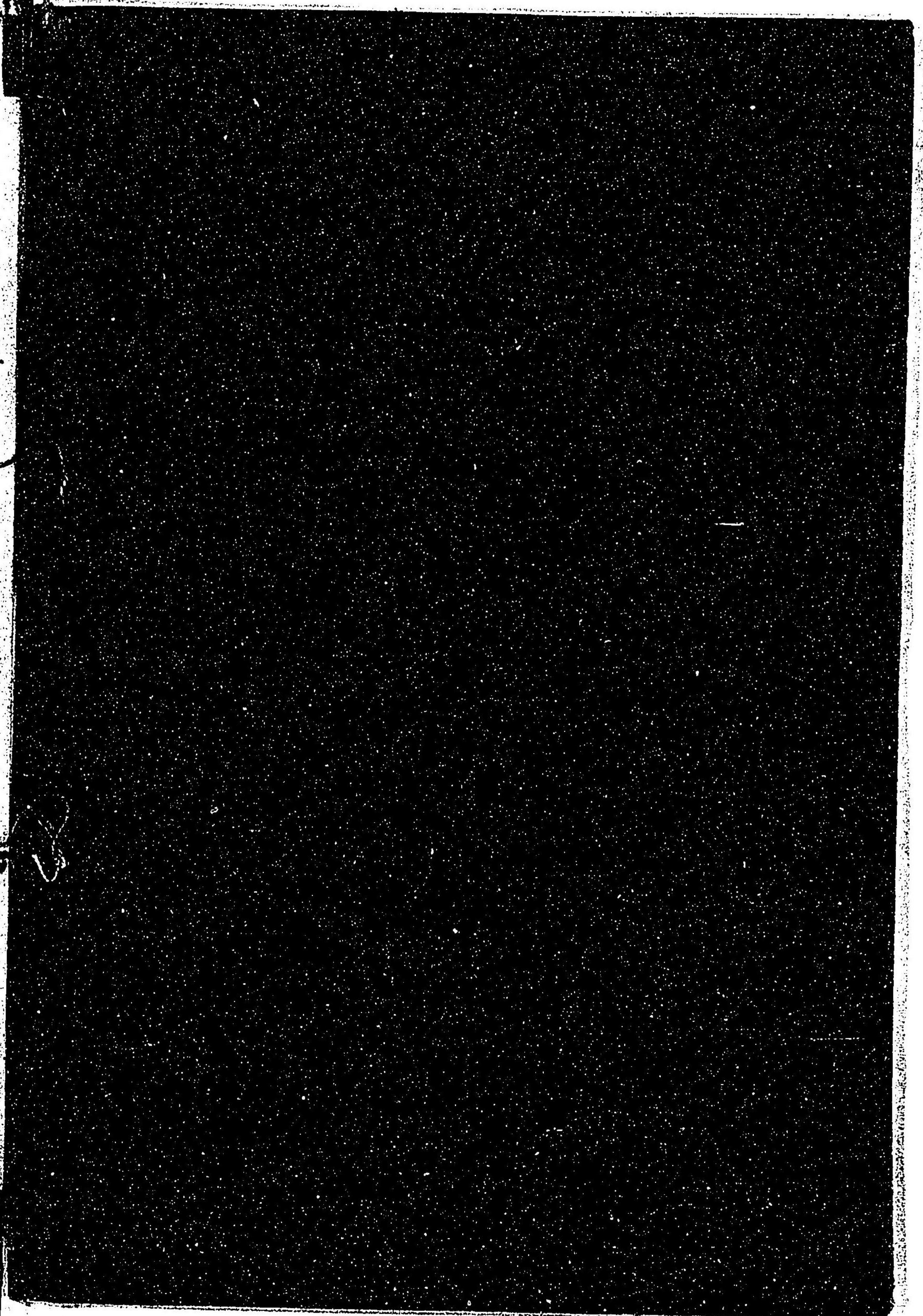


高



子

明治十九年十二月九日
1882



皇行

七十翁

蘇水題

新編
水題

蘇水
題

三光卷

凡例

一此書不二道孝心講第二祖行者三行此著せしめ
天の三光を始也

皇上政府父母の四恩以報を後々々事との愚夫愚婦
不知くゆする為に述るる也此故言葉鄙俚なれ
やも講中の人必知るべきと今梓に上す

一文俚言を渡りて文化に合はざるも文意以て意以棄ぶる不
ふする故に止得ざるを刪りて後とめて其旧以存すし作
者此意旨の失せざるを主と入れたり

一 三行ハ徳川幕府時代の入故東京を江戸と云ふ政府と御公儀と云ふ類多しまれば今世は不都合抄が如きの類ハ断然改めり
 一 三行の字又ハ假名も確と記し多し甲も乙や次第に寫し誤り後日其意旨を失ふ事故恐れ校正して同社ニ頒つゝ一人情日々浮薄に流れ

皇上政法を識り父母先輩長者を凌ぐの風日々月々増し加ふに恐れ此書故校正し同社に諸人に頒ち道の何物も知らぬを是れ國恩を報ゆるに萬一を思ふ因り已に愚まされ校正す社中の人幸々僭妄を咎むれ勿れ

明治十九年三月

安藤孝誌

三光卷

二祖 行者三行著
 川越 安藤孝校

三光純御恩禮

先天^{まが}に三光^{まが}忠御恩や申々日々^{まい}毎朝卯の刻より日の御登^{のぼ}り被遊^{あそ}此世界^{せかい}へ御光明^{くわうめい}を御配^{おん}被遊^{あそ}此人間^{にんげん}に申ふ及ん鳥類^{てうるい}畜類^{ちくるい}江河^{かうが}に鱗^{うしん}追^ま由^ゆ此御光明^{くわうめい}を日々^{まい}物を見^{もの}る事^{こと}得^え

善と見て賞し悪を見ず退き
釵戟チケツ振ヒり
喧譁ケンカ口論クワロ考カウる中ナカに御光明有故ミツクミヨク眼メ平ヘ
見る事を得ず危アヤシに所トコロ遠トウに衣類イリ其外諸
道具ドウ亦モ至ツキる迄マデは事コト成ナらざるも此御光明ミツクミヨク
手の金カネ一ヒトとせん一ヒトとせんト諸作物シヨサクも此
御光明ミツクミヨク依ヨりて蔭カゲ植ウエも刈カ乾シ
其外山谷サンカク海川カイカはらわぬ所トコロ魚イサも此御光明ミツクミヨク

怪我ケガもよくあるは行志コウシもよくあるは針ハリ
仕事シゴトはるふも農家ノウカは田タをさる魚イサもも煙火エンカ打ウ
小工コウジの諸道具シヨドウ諸品シヨヒン家作ケサク等トウ造營ゾウエイを
る小商人コウシヤは賣物ウリモノの善悪ゼンアクを見り賣買ウライカイいた
さる衣士イシの日々ヒヒ勤仕キンシはるこもんで此御光明ミツクミヨク
哉得ヤトせんら一ヒトと事コトもさる事コトはるもさる夜ヨは月光ゲツカウ
此コノ間マ夜ヤと御助ミツクミヨク希ス明日アシタ此コノ日ヒの御光明ミツクミヨク

城まきまき 明^あ照^ての^りせ^ん為^す夜^の月^も
乃御行道^の萬物^も潤^み人間^も鳥類^も
畜類川^も淵^も瀬^も乃鱗^も其^も躰^も成^る之^れ也
け了^り諸^の作物^も夜^の月^に御^言る^所書^す
日^に御^照る^所段^々と立^つ乃^び日^に御^了
る^所花^も咲^き月^乃御^潤成^り得^る實^也
乃^び此^の月^日の御^志ん^ふ乃^び實^也

や^り給^ふ星^光に御^德を^依り^て此^の世^に
界^に月^日壘^乃三^光乃^び立^つ乃^び實^也
萬^端皆^此御^光明^乃了^る昼^夜も^も事^也
乃^び千^々萬^々日^志乃^び御^恩
能^く書^盡乃^び又^也

天子^に御^恩を^申す^所此^の世^に有^る乃^び由^り
帝王^は乃^び一日^もお^きな^す乃^び實^也

帝王わうじやう王城わうじやう平皇居へいみやう給元たまはる天下てんか恭

平五穀成就へいごこくじゆうじゆ萬民快樂ばんみんがらく戎日じゆ新あらた給たまはる

國々こくご平國司へいこくし守護しゆご定給たまはる

故ゆゑ其國治こくぢ百姓ひやくしやう農業者のうぎやう安心あんしん營いんぎやう

人商にんじやう其道そのぢ心こゝろ儘ま勵いた應おこ

仁前後にぜんご如ごと

帝位ていゐ輕かろ兵へい乱らん企こゝろ有あ時とき世よ中ちゆう

我々われら萬民ばんみん安氣あんき事ことあ

假令たとへ一人ひとり者もの有あ萬ばん

帝位ていゐ戴いた事こと願ねが忽たちま失な事こと

帝德ていとく厚あつ所ところ日ひ乃すなは本もとお

帝業ていぎやう一日いちにち事こと下くだ所ところ事こと

皆

帝德ていとく厚あつ所ところ日ひ乃すなは本もとお

天子に御惠ふなり又

政府乃御恩や申き其御威光以下人の善

悪き見おし功有ると此を賞し罪あるもの或罰

主親に忠孝可る武士貞心あり輩へ召出

御褒美を被下鰥寡孤獨に類する御

憐愍以下御救え遊ばせられ願ひて病人を

醫學校より御藥被下病養調兼候も此

まぎで病院へ召出して良薬米錢を下され又

飢饉に節と御まゝ下され田畑の荒場迄も

御修復被為仰付其外百姓より田畑に境論

或は不作に御憐愍願ひ町方より喧嘩口論

火事盗賊の訴へ密夫密婦の訴訟變死横死に

訴其外何事もかまはざり事をも東京へ申

不及入國々在々より申出た御苦勞掛奉り

得共それ迄一々御裁許被遊夫とく御
 下されし御恩徳かき入盡し或盗賊
 等多く出さる御威勢を以て召され火事繁
 時御役人成以御糺し御吟味嚴敷御
 觸出し有之故不堅固小穩然と誠平
 難有限りも如き御恩きい下々心無善けて
 唯自分の欲小計り心付其身に勝手計りて

言立了かやうに云々を云々云々か
 無躰成る事杯と後と先も辨る口端申
 勿躰如事事を

又主人に御恩を申す畢竟主人持
 了其身計りの或は我親妻子眷属迄も主
 恩を以て養ふ事莫太に主恩を何程乃
 主人持

なまの人の小尊敬こんまつりせしむるも皆主人の御恩をまじ
其外何と年病ねびと煩わづらむも身上に潰つぶれと申
事も形く衣類諸道具迄もみまかぬ皆主
人の御恵みまじり

亦親乃恩を申と先胎内十月十日に恩を
始はじめとす其子母に胎内たいないに居て父は是
武士多れど奉公怠おこたとす農工商に三民

平たいたも面々おもむきに職分しやくぶんをまかせ食暮けむりする事
安やすくして養やしなふ母に胎内たいないに居る身は
行も其外給物たじもの立居迄常つねにかまひて慎しんみ
多おほくも毎まい日にちの給候事叶たまはぬ段々つたがた月重つきかさね
り身におもひまじりて隨まむ父に抱難儀かゝるが申して
安産迄晝夜にま遣ふ事容易やすに事
ハ多おほく夫より出生うしんされ母の躰はたる故に

よし父はかほし多くをわしに遣ふものなり
 夫より小兒せうち多くと成人するふ付大便小便の
 世話衣類等の物又病身なる小兒杯と格かく
 別親の世話多く難儀なり成人は随ま心こころに
 志こころがた又ハ疱瘡ぼうそうハ麻疹ましんもやるものなり心遣
 成人は志をわし手習針業其外藝能も仕付
 候苦勞物入餘よそ外そとに子供は美敷敷衣類着

ぬれを見ても我子よも着ておもしろい親の
 志こころ元もとより上うへの民たみや異ちが國くにに為ため君きみの為
 養育も重た事ことを胎教たいけうより御ご心こころに
 下したに志こころを親おやに貧ひん乏ぱふと思おもふ餘あま
 計けいを受うるものあり成長せいじやうの後のちも其その志こころ
 ちねきを病氣びやうきを何なにも不身持
 索もとめり了しま旦あした夜よ心こころをなむる事ことありげなり

御政府に御旋^{まわ}るも背^{そむ}かたはる事^{こと}に不^ふ孝^{こう}の事^{こと}も
 孝^{こう}の事^{こと}も親^{おや}の其^{その}自分^{おのれ}に不^ふ孝^{こう}の事^{こと}も
 只^{ただ}世上^{よこしま}に不^ふ孝^{こう}の事^{こと}も歎^{なげ}かた
 年の時^{とき}に寒^{かん}夜^やに我^{われ}身^みに冷^ひらる事^{こと}も
 唯^{ただ}我^{われ}子^こに冷^ひらる事^{こと}も遣^ある暑^{あつ}時^{とき}
 其^{その}身^みに蚤^{ひら}蚊^かの咬^かむ事^{こと}も夜^よに
 物^{もの}に我^{われ}の身^みに咬^かむ事^{こと}も

是^{こゝ}の世^よに我^{われ}子^こに何^{なん}の親^{おや}の事^{こと}も
 けさる事^{こと}も人の心^{こゝろ}に如^{ごと}く思^{おも}はる事^{こと}も
 れど須^{もと}弥^み山^{やま}と低^ひく滄^{そう}海^{かい}も淺^あく善^よき事^{こと}も
 惡^{わる}き事^{こと}に付^つ親^{おや}に晝^{ひる}夜^よに世^よの事^{こと}も
 よかやうに恩^{おん}儀^ぎも知^しる親^{おや}に不^ふ孝^{こう}の事^{こと}も
 見^みる事^{こと}も人間^{にんげん}に如^{ごと}く思^{おも}はる事^{こと}も
 鳥^{とり}類^{るい}に鳩^{はと}の三^{さん}枝^えに礼^{れい}有^ある事^{こと}も

枝子母こゝろと母ははのちかままとぬれ枝子こゝろと母ははと
 とこゝろ亦鳥からすとす巢たちとす後親鳥うしへ食たを養ま
 心こゝろかへこゝろへこゝろ鳥類畜類ちくしゆでき重おもかかけけ如ごとし
 況いは人間にんげんと産うれく親おやよ不孝ふけうなるもの畜生ちくせいを
 おおささるるへへ勿な躰たをも事ことおおへ

右天此三光の御恵と地の

天子政府に御大恩國家の主親此高恩た

吾人間一生乃間言まごをも事ことおおへへ名言なごをも盡つ

しんごをも事ことおおへへ甚かん辨べん

用もちふふ事ことおおへへ我われ心こゝろをも得えや決定けつぎをも盡つ

形かたち食行御傳書けいぎんごでんしよ平へいも只古ただふる此こ為人ひと此こ為なと

此こを教しよおおへへ候まうゆゆ重おも女子こゝろ供ども乃聞安きこするん

多おほ見み子俗言こくごをも事ことおおへへ書志しよおおへへ置おけけの

形
 文化五年戊辰閏六月三日

一行術女同行へ書傳へ給ふ

惣として女子は道にまよふ事なくして縫針の藝
能く扶桑國乃本理をこれ等油断なく相勤
其外心の持やう事一々物に可成る事
我ま事なき事之何事にかたしき事おそしき
心根を捨て人さうに成む心をもたぬ人
まが事成る人來る時上中下男女共

ふべき心保ひ此挨拶する日誠ふ月日の
御照り被遊候如く唯何事もなす事
く事なす我心平に成やう地者なす事其
まが事見了一筋に柔和な心成らた
まが事右に如く相守候得ておれは
親ふ孝行此心も誠は起れ主人は忠節の
心と誠に出む事心得誠なる忠孝ハ

先かゝり致方此能き時き志取く忠孝の
心出る萬一我わが心こゝろああ事ことのの心こゝろ忍しのび
よよ心こゝろ事こと一ひと時とき此こゝろ水みづ一ひと多た一ひと是
萬一の守り目まもりめ返かへりの心こゝろ違ちがひの心こゝろ
無なきの心こゝろ一ひと萬ま劫ご誠まことのの女子むすめのの心こゝろ
相守給ふ事一人間ひとのの命いのち數かずもも無
名なのの事こと代しろふの残のこるの事ことならばの事ことならば

ああのの女子むすめのの心こゝろ淺あはれの心こゝろ事ことのの心こゝろ一ひと言こと
申事まこともも又また也なり間違まちがひの無なきの事こと一ひと言こと
も申事まことのの心こゝろ付つくの大切たいせつなの事こと一ひと言こと
別わかりの心こゝろ仙元せんげんのの御信心ごしんじんのの心こゝろ事こと
やや深ふかいの奥おく深ふかいの事こと一ひと候得あはれの事こと
心こゝろをを金石きんせきにに如ごとくの女子むすめのの道みちと相立あひまつの初はつめの
不自由ふじゆうなの心こゝろ一ひと禮れいをを乱みだすの事こと一ひと言こと
義ぎのの心こゝろ事こと一ひと言こと

取行成るるを以て心より給ふ事一 元祖御
直傳へ能く御事をもて誠は道に相叶候
やうありて唯心眼取失ぬる事平致度
事專一なり多し願心はよく信願
を成るるを教の道も亦事阿んが
第一色欲平事平候得る一心よく二
と誠を破る三つ平悪名出た人家成乱す

四つは我慢出た人さる此四つは
之能く慎むかん事多し朝夕に御恩禮を
天下泰平國土安穩萬方の衆生草木も亦
多し川乃鱗迄も御恩を以て一助す
御助被下候得や祈り外も志を以て
信心同行と申す及ぶ兄弟は如く事
唯是は經記も亦悪事なれぬ事平哉

持了其惡意... 萬劫同行... 願少多利

三光卷終

明治十九年九月三十日版權免許
同年十月 出版 定價金拾三錢

著述人 故人 第二祖行者三行

校訂人 埼玉縣平民 安藤孝

武藏國八間郡 五百七十番地

出版人 東京府平民 伊藤廣成

同國荏原郡上旨黒村 八十三番地



